

辛亥革命の成果が袁世凱らの旧勢力に横どりされてから三年目には、四年にわたってつづいた第一次世界大戦の火ふたがきられた。この第一次世界大戦は、アジアにおける列強の勢力関係を大きく変えた。そればかりか、この数年のあいだに、中国の民族産業は急速な発展をとげ、その影響で、これまでよりはるかに有力な民族資本家層と労働者階級とが政治戦線に登場することになった。こうした激動する社会情勢のもとで、辛亥革命の成果を奪いとった旧勢力も、はげしい内部矛盾を露呈し、すくなくとも安定した反動支配をうちたてることができなかった。こうして、辛亥革命の成果は横どりにされたが、まもなく中国革命は新しい波を迎えることになる。

#### 民族資本の急激な発展

第一次大戦が中国にあたえた影響のなかで、中国に有利な作用を果したものの第一は、この大戦で西欧資本主義の中国への圧力がゆるめられ、その雲の暗れ間を利用して、中国自体の資本主義が急速に発達したことである。そして、それによって、民族資本家階級が、これまでのような華僑にかなりの比重をおいたものとしてではなく、ともかくも自国の産業を基盤にもつ階級として登場した。また、これと同時に、中国の労働者階級も人口二〇〇〇万をこえる階級となり、まもなく大きな政治運動を展開する基盤がうまれた。

大戦中の中国各港の出入商船のトン数は、大戦前の一九一三年を一〇〇とすると、翌一四年には一〇五であったが、一五年には九七にへり、一六年には九四、一七年には九三、一八年は八六と激減した。中国の貿易は、長いあいだ巨額の輸入超過をつづけてきたが、その輸入超過額も、一九一三年には一億六、〇〇〇万海關兩であつたものが、一八年にはわずかに一、六〇〇万海關兩に、つまり一〇％にも減少した。このことは、中国産業のうえに毎年のしかかっていた外国商品の圧力が大きく軽減されたことをあらわしている。したがって、それは中国民族産業の発展を促さずにはいなかった。もちろん、このわずかなチャンスで、中国自体の重工業が建設されるはずはなかった。しかし、紡績、製粉、マツチなどの軽工業部門で、民族資本によって工業がおこされた。

中国資本の紡績工業は、一九一二年には四八万錠に達していたが、(日本は一八九五年にすでに五〇万錠に達していた)一九年には六五万錠になり、約三割を増加した。製粉工場は、一九〇〇年には二工場だけであつたのが、一六年には六七に、一八年には八六にあつた。大戦前に、中国は小麦粉の輸入国であつたが、一五年から二一年にかけては輸出国に転じた。製糸工業も、一九一九年には一三年に比べて一六八％の生産増加となった。タバコ、マツチ等の工業も急速に増大した。政府に登録されている工業企業の資本額は、一九一四年に六、二〇〇余万元であつたのが、一九二〇年には一億五、五〇〇万元となり、一五〇％の増加をみた。資本金五〇万元以上の大企業は、一九一四年には全企業数の



四％であつたが、一九二〇年には一四％にふえた。中国の近代的な銀行は、一九一一年には八行であつたのが、一九一九年には四八行にふえた。

こうして中国資本の工業がのびていた同じ期間にも、日本、アメリカの資本の進出は急激であつたが、それにしても、民族資本の工業が、資本金からみて倍以上にふえたことによつて、中国の資本家階級は、量質ともに強まった。資本家階級は、一九一一年の革命当時とはちがつて、一つの独立した階級として成長した。といっても、かれらがあつめた資本の多くは、農村の地主の蓄積であつて、かかれらと地主階級のつながりはたたれていなかった。しかし、かれらは、上海、天津、漢口というようにはいなかった。日本の二一カ条要求がつきつけられたあとで、中国の資本家団体は、漢口や長沙で（罷市）、学生たちを声援した。こうした動きが、第一次大戦をつうじて力を強めた資本家層の自覚と要求をあらわしていることは明らかであつた。